

“Tintern Abbey” から *The Prelude* へ

——詩人 Wordsworth の成長——

山田 尚 仁

“Was it for this. . . ?” 1799年秋ひとまず完成にいたり、妹 Dorothy によって清書された2部 978行からなる詩は、この問いで始まる。この、現在 *The Two-Part Prelude* という呼び名で知られる詩が、6年後に大きく改訂され、13巻、約 8500行からなる Wordsworth の代表作 *The Prelude* となったことはよく知られている。Wordsworth 自身は、これを自己の最高傑作とは考えていず、彼が生涯をかけて完成するはずの大作は、未完に終わった *The Recluse* であった。これは Coleridge が、本来自分が書くつもりだった philosophic poem を、Wordsworth が書くにふさわしい人物であると考え、彼に強く勧めたことから始まったものである。そして Wordsworth は 1798年3月には *The Recluse* を書くことを決意し、既にかかなりの長さのものを書いていたことを友人への手紙の中で述べている。

I have been tolerably industrious within the last few weeks.
I have written 1300 lines of a poem which I hope to make of considerable utility. Its title will be *The Recluse; or, views of Nature, Man, and Society*.⁽¹⁾

ここに述べられている 1300 行からなる詩に当たる作品は、単独のものとしては当時の作品の中には見あたらない。Kenneth R. Johnston は、それが “The Ruined Cottage”、“The Old Cumberland Beggar”、“A Night Piece”、“The Discharged Soldier” の4つを合わせたものであらうと推測している。⁽²⁾ これらのうち、もっとも長く、そして実際に後に *The Recluse* の Part II である *The Excursion* の第1巻となった “The Ruined Cottage” は、既に 1797年に書かれていた。そして Coleridge が、Wordsworth が philosophic poem を書くにふさわしいと確信したのは、この詩の朗読を聞いた時であった。詩としての価値もさることながら、そのテーマがまさに彼の思い描いていたものであったということが、Coleridge を強く感動させたの

である。そして、それは Wordsworth にとっても極めて重要なテーマであり、この後も同じテーマの詩を多数書いていったのであるから、Coleridge に勧められて *The Recluse* を書く気になったのも当然のことであろう。そして “The Ruined Cottage” を *The Recluse* の一部としてふさわしいものとするために、語り手である Pedlar の生涯を語る長い詩を挿入することで、彼を “Nature, Man, and Society” に関する哲学的考察を行い得る人物とし、そして Margaret の suffering に対する解釈を行わせたというのが、Johnston の解釈である。⁽³⁾ こうして Coleridge の励ましのもとに、*The Recluse* は書き進められていったが、それは 1798年10月のドイツ行きによって中断されてしまう。ドイツで Coleridge と Wordsworth 兄妹は別れて、Coleridge は Ratzeburg に行き、Wordsworth は Goslar で冬を過ごすことになったが、この年 Goslar は記録的な寒さとなり、Wordsworth たちは、大雪によって下宿の中に閉じこめられてしまったのである。この外界から隔絶された孤独の中での内省から、*The Prelude* は書き始められた。Johnston の言葉を借りるならば、“If the first *Recluse* poems owe much of their existence to Coleridge’s presence in 1797–98, the first *Prelude* poetry owes its existence to Coleridge’s absence from Wordsworth in 1798–99” ということである。⁽⁴⁾

こうして書き始められた *The Prelude* は 1799年の段階では、*The Recluse* が進まないことへの apology であり、さらに *The Recluse* を書くべき者としての自分の資格と使命を確認するものであったが、その後、幾多の改訂を経て、今日では、*The Excursion* よりも重要で優れた作品とみなされていることは、既に述べた通りである。Wordsworth 自身は、*The Prelude* のことを、gothic church である *The Recluse* にとっての ante-chapel であると述べている。⁽⁵⁾ そして、*The Recluse* がこそが、自分の最も重要な作品となるべきものであるという考えを生涯捨てず、そのために *The Prelude* を生前に出版することはなかった。しかしそれは、*The Recluse* の序であるという *The Prelude* の

性格から、*The Recluse*が完成されないうちは出版できなかったからであり、序にすぎない詩を、それにふさわしい規模のものであった1799年版*The Two-Part Prelude*から、あれほどまでの大作に書き改め、しかもその後生涯にわたって改訂し続けたことから、言葉以上に彼にとって重要な作品であったことが想像できる。

最初に述べたように、*The Two-Part Prelude*は“Was it for this”で唐突に始まっている。そしてこの“this”の内容を説明する部分はこのときには書かれていず、Dorothyはこの詩を“a poem of which the beginning is not written”と呼んでいる。⁹⁶1805年版では、この前に271行もの詩がつけられており、“this”の内容は、*The Recluse*を書きたいという願いを持ちながらまったく書けないでいる状態のことだと語られる。なるほど、この時は、*The Recluse*を書き始めて以来既に7年もの時が経っていながら、まだそれらしきものは少しも書いていなかったのだから、納得できることではあるが、この詩を書き始めた時は、*The Recluse*のことを手紙で友人に語ったのと同じ年のことである。その時にWordsworthは本当に1805年版のようなことを考えていたのであろうか。

“spots of time”

Wordsworthが*The Recluse*を目指して書き始めた時に、書かれた詩の1つが“The Pedlar”であったことをJohnstonが指摘していることは既に述べたが、このPedlarは、Wordsworth自身といってもよい人物である。Wordsworthは、このPedlarの生涯を自らの人生を振り返りながら描いたので、Pedlarは、もし自分がそのような環境におかれたらそうなのであろう人物であることを、自分でも述べている。⁹⁷そして、“The Pedlar”の中のone lifeに言及した部分は、後に*The Two-Part Prelude*の中にheをIに変えて入れられたのである。⁹⁸このことを考えると、Wordsworthは“The Ruined Cottage”を書いた結果、Coleridgeに勧められて*The Recluse*を書くことになり、そのために“The Pedlar”を挿入した。その結果自分自身の過去、生まれてからこれまでの成長の過程、自然の中における教育といったことを熟考することになり、それがついには*The Prelude*として結晶したということが言えないであらうか。さらに“The Ruined Cottage”とは普通の人は見向きもしない、或いは見ても別段気にもとめないようなものを見て、それに関わりを持った人々、それが特別な意味を持っていた人々のことを物語るによって、聞く者の心にそれを強く焼き付けるとい

詩である。この聞く者に深い感動を与える物語を語るに当たって、その中心にごくありふれたものを置き、そこに焦点を合わせることで、より強い印象を与えるという詩は、Wordsworthに特徴的なものである。そのものとは、イチイの老木であったりサンザシであったり、あるいは泉であったり羊を入れる囲いであったりするが、およそ余り人目を引かないようなものであることが多い。⁹⁹これによってWordsworthは、日常見慣れてしまったことで目新しさを失ったものに新たな魅力をつけ加えるというColeridgeの詩論を実践しているともいえる。つまり、ありふれた人目をまったく引かないものに、深い感動を結び付けることによって、人の心に強く印象づけるのである。が、また、こういう何でもない光景が、時間の流れから切り離されて、永遠の輝きを持って心に刻まれ、何度でもよみがえってくるということ、そういうある一つの場所、あるいはものへのこだわりということは、あの有名なspots of timeというWordsworthの信念にもつながってくるものである。

*The Prelude*の中心テーマの一つが、spots of timeであることは誰もが認めるであらう。特に1805年版よりも緊密な構成を持っていたとJonathan Wordsworthが考える1799年版においては、spots of timeがまさにその中心にあったといえる。¹⁰⁰人間の心の成長過程を記憶の中に辿って分析してみた結果、きわめて重要な意味を持っているのがspots of timeであるとWordsworthは考えたのである。

さて、1805年版*The Prelude*においては、spots of timeは第11巻に出てくるため、一見その後にくる2つのエピソード、すなわち絞首台を見たことと父親の死の話だけがspots of timeであるかのように思えるが、実際はそうではない。*The Two-Part Prelude*では、spots of timeはFirst Partにでてくる。そして、小鳥の囀、大ガラスの巣、ボート盗み、スケート、水死体といったエピソードの後にすぐ続くため、First Partのエピソードのほとんどをspots of timeとみなすべきであるように思われる。¹⁰¹例えば、大ガラスの巣の上に不安定にぶら下がった時の体験は、あたりの風景が突然人の言葉では言い表せないようなものになってしまうという点で、絞首台のエピソードと極めて似ているのである。

spots of timeとは、文字どおりこれまでの生涯という一続きの時間の中のいくつかの点ではあるが、その特徴は、その時に感じた強い感情がはっきり記憶されているのと同時に、その感情のために、ありふれた光景がまったく違う色合いを持って見えてきて、ずっと後

になっても、ありありと思い浮かべられることである。こういう体験を重視する Wordsworth だからこそ、“The Ruined Cottage”のような詩を書くようになったのであろう。何でもない場所に特別な感情を付与することによって、その場所を際立たせ、それによって、逆にその感情に一つの核を与え、より強烈なものとし、記憶に永遠に残るものとするのである。

既に述べたように、“The Ruined Cottage”が“The Pedlar”を含む900行余りの詩となってから半年余りの後に、*The Prelude*が書き始められたのだが、その*The Prelude*を生み出すものになるものが、既に“The Ruined Cottage”の中に含まれていたということがこれでわかる。しかし、さらにその2つの詩の間に、Wordsworthの spots of timeの考えを生み出すのに重要な役割を果たした詩が書かれている。それはいうまでもなく“Tintern Abbey”である。“Tintern Abbey”は Wordsworth の、一人称で書かれた最初の自己分析の詩であり、*The Prelude*の、ひな型とでも言うべき詩である。¹²⁾しかし、“Tintern Abbey”はその創作時の状況からもわかるように、Wordsworthの当時の考えが、きわめて素直に吐露されたものであるし、また同じテーマが後に“Immortality Ode”の中でも繰り返されたように、Wordsworthにとって非常に重要な詩であるから、それが彼の詩人及び人間としての成長過程に持つ意味を、ここで考えてみたいと思う。

“Tintern Abbey”

この詩は、その長いタイトルが示すとおり、Wye川を再訪した時の感慨を語ったものであり、中心テーマは、5年前はじめてここを訪れた時とは、今の自分はすっかり変わってしまったが、その結果、人間と人間を取り囲む自然の中に“A presence”すなわち one lifeの存在を感じるようになり、そのため以前よりもっと深く自然を愛するようになったというものである。この one lifeという考えは、Wordsworthが Coleridgeより教えられたものだった。そしてそれをまず“The Pedlar”の中で Wordsworth は述べる (in all things / He saw one life, and felt that it was joy.)。そして、その同じ一節を *The Two-Part Prelude* の中に自分のこととして挿入したことは既に述べた通りである。その2つの詩の中間において、“Tintern Abbey”はそれを実際の体験と結び付けて語るのである。

では、この詩の内容を具体的に見てみたい。Wordsworthはこの詩を出版するときには、必ずあの長いタイトルを書いた。そのタイトルによって、この詩が書か

れた場所、日、そして状況、すなわち、Wye川再訪ということが明示される。そして、その再訪ということは、この詩の最初の部分、22行目までにおいて、まず5年の歳月の経過ということを強調し、さらに“again”と“once again”を交互に、併せて4回も繰り返すことによって、読者に強く印象づけられる。これは、このWye川再訪が Wordsworth にとっていかに大きな出来事であったかを、そして Wordsworth がそう考えたがっていることを示す。そして、このあと49行目までで、この美しい風景が、自分が騒々しい都会にいた時に、いかに自分にとって慰めとなってくれたかが語られる。

These beauteous forms,
Through a long absence, have not been to me
As is a landscape to a blind man's eye:
But oft, in lonely rooms, and 'mid the din
Of towns and cities, I have owed to them
In hours of weariness, sensations sweet
Felt in the blood, and felt along the heart;
And passing even into my purer mind,
With tranquil restoration: — (ll. 22 - 30)

これを見ると、5年前にここを訪れた時のこと、その記憶が Wordsworth にとって spots of time に極めてよく似た働きをしていたことがわかる。*The Two-Part Prelude* では次のように述べられている。

There are in our existence spots of time
Which with distinct preeminence retain
A fructifying virtue, whence, depressed
By trivial occupations and the round
Of ordinary intercourse, our minds —
Especially the imaginative power —
Are nourished and invisibly repaired;
Such moments chiefly seem to have their date
In our first childhood.

(First Part, ll. 287 - 296)

ここで、spots of time は人生の最初期におもに生じるものであると述べられているが、Wye川訪問は、Wordsworth 23才の時のこととはいえ、その一つとなり得るいくつかの特徴を備えているように思われる。*The Prelude* にでてくる spots of time の例のいくつかの性質を考えてみると、まず、まだ外界が未知なるものの驚異、新鮮

さに満ちている時、“Immortality Ode”の言葉を借りれば、“when meadow, grove, and stream, / The earth, and every common sight, / To me did seem / Apparell’d in celestial light, / The glory and the freshness of a dream”(ll. 1-5)という時のことであるから、大人にとっては何でもないものに対しては鋭敏に反応できる心を持っているということである。さらに、罪の意識、及びそこから生ずる恐怖に包まれているような時に生じやすいということが言える。その結果、ボート盗みのように“unknown mode of being”に悩まされたり、大ガラスの巣や絞首台の体験のようにあたりの風景がこの世のものとも思えない色に変わってしまったりするのである。では“Tintern Abbey”ではどうであろうか。この時 Wordsworth はやはり尋常ならざる精神状態になったのである。それを Jonathan Wordsworth が分かりやすく説明してくれている。

Between two statements (ll. 68-71 and 73-6) that show Nature as truly all in all, Wordsworth recollects the special circumstances of his first visit to the Wye, when he had indeed been fleeing from something that he dreaded. The previous month had been spent on the Isle of Wight, opposite Portsmouth where the British fleet was preparing for war with France. Wordsworth’s political sympathies were with the French republicans (see 1805, x. 249-74), and in addition France was the country of Annette Vallon, whom he hoped to marry, and their nine-month-old daughter Caroline, whom because of the war he had never even met. He arrived at Tintern on his way from the Isle of Wight to South Wales in a feverish and exhausted state of mind, having crossed Salisbury Plain on foot and largely without food. (43)

このように恐怖と不安の入り交じった感情の中にいたわけであるし、また自然に対する Wordsworth の反応は、たとえば roe のように跳ね回るところといい、sounding cataract, mountain, wood というものが、passion, appetite というような自分の激しい肉体感覚と一致するほどの力で迫ってくるところといい、まだ子供の頃の特徴を多く残していると言えるだろう。例えば、*The Prelude* では子供の喜びが“those fits of vulgar joy / Which through all seasons on a child’s pursuits / Are prompt attendants”(1805, Book First, ll. 609-11) や、“that giddy bliss / Which like a tempest works along the blood / And is forgotten”(1805, Book First, ll. 611-13) と表現されるが、“aching joys”、“dizzy raptures”(Tintern Abbey, ll. 84,85) とは、これとほぼ同じ状

態といえる。

このようにして、Wye川の岸辺に立ってしばらく過去を回想するうちに、その風景が、そして自分がかつて精神的苦痛の中にいた時にそこを訪れたことが、自分にとっていかに大切な体験であったか、それによって自分がどれほど力づけられたかということに、Wordsworth は気づいたわけである。では今再訪したことはどういう意味を持つのか、それが 58-111 行目で語られる。この部分は、Wordsworth が 5 年の間に自分自身に生じた変化を語っているところであり、また one life の信仰を述べているところでもあって、有名で重要なところであるが、意味の論理的つながりを追うのがなかなか困難な部分である。恐らくそこに、Wordsworth が自分の変化を肯定的に受けとめようとしながらも、やはり驚きと困惑を隠せないでいることが表れているのであろう。そのため、この部分及びさらにそこからあとの妹に対する呼びかけの部分は、どうしても elegiac に聞こえてしまう。しかし、まだこの段階では、Wordsworth は one life の思想を強く信じており、まったく疑いを持っていなかったのである。そういうわけで、同じ自分の変化を語るのにおいても、“Immortality Ode”では、外界の変化ということを実先に述べるのに対し、“Tintern Abbey”では、まず Wye川の風景の美しさを細かく描写することから始めている。そのため、読者は初め Wordsworth が以前と同じく美しい風景を見て喜びに浸っているかのような印象を受けてしまう。しかし実際は以前とは違って見えているのである。といって景観が変わったわけではない。それどころか昔と全く同じであることを強調するために、その風景を構成するものを 1 つ 1 つ取り上げて、自分の記憶と比較し、確認していくのである。では何が変わったのか。ここではそれははっきりとは語られない。ただ自分が変わったというだけである。そして、その変化がむしろ歓迎すべきものであるという信念のために、外界の変化はほとんど問題にされないのである。しかし全く問題ではないかというと、そうでもない。58 行目から少し引用すると、次のようになっている。

And now, with gleams of half-extinguished thought,
With many recognitions dim and faint,
And somewhat of a sad perplexity,
The picture of the mind revives again:
While here I stand, not only with the sense
Of present pleasure, but with pleasing thoughts

That in this moment there is life and food
For future years. (ll. 58-65)

この部分は意味がわかりにくいところである。“The picture of the mind”とは何であるのか、なぜこの瞬間に将来のための life and food があるのか。“The picture of the mind”に関しては Jonathan Wordsworth が解説している通りであろう。すなわち、“Wordsworth feels that the picture in his mind ought to be identical to the landscape in front of him, but it isn't”ということである。⁽⁴⁾要するに Wordsworth の考えは、この詩に述べられている通りに進んでいくのである。まず、再び目にした Wye 川の美しさに感動し、そしてこの風景がいままでどんなに自分を慰めてくれたかということを思い出して、感謝の言葉を発する。そのように過去を振り返っていると、その記憶の中の Wye 川の風景が、これまで何度もそうしたようによみがえってきたのである。しかし今既に現実の風景を目の前にしているのに、しかも、自分に生じた変化がそれを変えてしまっているのに、以前のように鮮明にはよみがえらず (With many recognitions dim and faint)、またそのときの感動も忘れられようとしている (with gleams of half-extinguished thought)。そのため悲しみをともなった当惑を感じているのである (somewhat of a sad perplexity)。これまで自分の支えとなっていた大切な記憶の風景、それがこの再訪によって半ば失われてしまったのである。

ではそれをどう克服するかというと、ここに one life の信仰が入ってくるのである。

That time is past,
And all its aching joys are now no more,
And all its dizzy raptures. Not for this
Faint I, nor mourn, nor murmur; other gifts
Have followed; for such loss, I would believe,
Abundant recompense. For I have learned
To look on nature, not as in the hour
Of thoughtless youth; but hearing oftentimes
The still, sad music of humanity,
Nor harsh nor grating, though of ample power
To chasen and subdue. And I have felt
A presence that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
Of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns,

And the round ocean and the living air,
And the blue sky, and in the mind of man:
A motion and a spirit, that impels
All thinking things, all objects of all thought,
And rolls through all things.

(ll. 83-102)

失われてしまった “aching joys” に対する “abundant recompense” として、“still, sad music of humanity” を聞くことができるようになったというわけだが、“loss” という言葉や “I would believe” という表現、さらには “still, sad music” が 60 行目の “sad perplexity” とともに “aching joys” に対比されてしまうために、この部分は幾分悲しげな響きを持つてしまうのである。しかし実際は “still, sad music of humanity” は聞く者を sad にするわけではない。それ自体は「悲しげな音楽」かもしれないが、聞く者には力と喜びを与えるものなのである。そして Wordsworth は Nature に目を向けながら music of humanity を聞くことができるようになったと言っているのである。それはつまり、自然と人間との関係について深い真理に到達した今、自分が書きたいと望んでいる大作、そのテーマが “Nature, Man, and Society” についての考察である *The Recluse* を書くのにふさわしい存在に Wordsworth がなったということを意味する。そして music of humanity を聞きながら Nature を見るためには、Nature の中の、かつて人間がいた痕跡を残しているような場所にたびたび注意を向けるようになる。こういう、普通の人なら簡単に見逃すか、気づいても特に何の感慨も覚えないうなもの Wordworth は決して見逃さないのである。それは、崩れかかった小屋であったり、あずまやであったり、イチイの木やサンザシであったり、羊を入れる囲いであったりする。そしてたびたびそれらは自然の中に半ば消え失せかかっているのである。たとえば、Pedlar が物語を話す小屋は “four naked walls / That stared upon each other” (*The Ruined Cottage*, ll. 31-2) というものでしかなく、そのそばにある庭は、“a plot of garden-ground now wild” (ll. 54-5) である。“Hart-Leap Well” の bower や pleasure-house は朽ち果てていて、それを見た詩人の感想は “Here in old time the hand of man hath been” (l. 112) というものとなっている。また Michael の Sheep-fold は “a stragglng heap of unhewn stones” であり、それは “one object which you might pass by, / Might see and notice not” と表現される (Michael, ll. 15-17)。さらに “Tintern Abbey” の最初の風景描写においては、まずその自然が wild であるこ

とが強調される。そしてその中にある "plots of cottage ground" と "orchard tufts" は、森の緑の中にすっかりとけ込んで一体となっているし、hedge-rows は "hardly hedge-rows, little lines of sportive wood run wild" であり、それから pastoral farms は戸口のところまで緑におおわれているのである。しかし、この見事に人工物が自然にとけ込んで、まるで人はいなくなってしまったかのような風景の中からも、煙が立ち上って、わずかに人の存在を示している。この煙が本当は何からでているものかは明かでないが、しかしそれを見て Wordsworth の意識にのぼるのは、vagrant dwellers や hermit といった存在なのである。こういう Wordsworth の視点から、"The Ruined Cottage" が書かれ、あるいは "The Thorn"、"Female Vagrant"、"The Mad Mother" といった詩が生まれ、さらに "The Brothers" や "Michael" というまさに "still, sad music of humanity" というべき傑作が書かれていくのである。しかし、music of humanity は必ずしも悲しげであるとは限らない。喜びに満ちていることもあるはずである。そして "We are seven" や "The Idiot Boy" といった詩も書かれているわけである。それでもなお、music of humanity を「静かで悲しい」と限定したのは、*The Recluse* が頭にあったことであろうし、また Jonathan Wordsworth が、"The Ruined Cottage"、"The Brothers"、"Michael" の3つの詩に関して述べたように、Wordsworth は human suffering からこそもっとも深く気高い人間の感情が得られると考えたからであろう。

Wordsworth draws our attention to their suffering not because he is morbidly interested in pain, but because, like Shakespeare, he sees it as capable of bringing out the deepest and noblest human emotions. ⁽⁴⁵⁾

こういった詩は "soothing thoughts that spring / Out of human suffering" (Immortality Ode, ll. 184-5) を与えるのである。

失われた "aching joys" には "the joy / Of elevated thoughts" (ll. 94-5) が対比されるべきであろう。そして、その新たな喜びは "A presence" すなわち one life の存在を感じたことから生じたのであり、そのおかげで Wordsworth はたとえ自分が昔とは変わってしまっているようにも、今日の前に見ている Wye 川の自然に対する愛は、決して変わってはいないということを確信できたのである。

Therefore am I still

A lover of the meadows and the woods,
And mountains; and of all that we behold
From this green earth; of all the mighty world
Of eye, and ear, — both what they half create,
And what perceive; well pleased to recognize
In nature and the language of the sense
The anchor of my purest thoughts, the nurse,
The guide, the guardian of my heart, and soul
Of all my moral being.

(ll. 102-111)

というわけで以前とはすっかり変わってしまった姿で目に映っているこの自然は、たとえ aching joys や dizzy raptures をもって自分を感動させてくれないとしても、今や自分は真理に目覚め、"nature and the language of the sense" の中に "The anchor of my purest thoughts, the nurse, / The guide, the guardian of my heart, and soul / Of all my moral being" (ll. 108-111) の存在を認めて、自然と自分とのほかに深い結びつきを確信したのであるから、この考えによって今後自分は励まされていくことになるだろう、とここまで考えて、Wordsworth は "in this moment there is life and food / For future years" (ll. 64-5) と言っているのである。そういうわけで、そのように考えながら、Wye 川の岸辺に立っていたときに、sad perplexity をともなう pictures of the mind がおぼろげによみがえってきたにもかかわらず、彼は "so I would dare to hope" (l. 65)、すなわち、今この瞬間に将来のための life と food があるはずだと主張できたのである。

では、もしこの考えに到達していなかったとしたらどうであったか、そのことが 111 行目より語られる。

Nor perchance,

If I were not thus taught, should I the more
Suffer my genial spirits to decay:
For thou art with me here upon the banks
Of this fair river; thou my dearest Friend,
My dear, dear Friend; and in thy voice I catch
The language of my former heart, and read
My former pleasures in the shooting lights
Of thy wild eyes. Oh! yet a little while
May I behold in thee what I was once,
My dear, dear Sister!

(ll. 111-121)

この詩の冒頭で、wildであることが強調された Wye 川の自然と調和し得る “wild eyes” を持った妹が、この場所を初めて訪れた感動に、自分がかつてそうしたように目を輝かせ、歓喜の叫び声を上げている、その姿を見て、それと一体化することによって、Wordsworth は、今風景から直接には得ることができなかった昔のような *aching joys, dizzy raptures* を、もう一度感じることでできたのである。このように他者を通してその喜びを味わうということは、Wordsworth がよく行うことであった。

Ye blessèd Creatures, I have heard the call
 Ye to each other make; I see
 The heavens laugh with you in your jubilee;
 My heart is at your festival,
 My head hath its coronal,
 The fulness of your bliss, I feel — I feel it all.
 Oh evil day! if I were sullen
 While Earth herself is adorning,
 This sweet May-morning,
 And the Children are culling
 On every side,
 In a thousand vallies far and wide,
 Fresh flowers; while the sun shines warm,
 And the Babe leaps up on his Mother's arm: —
 I hear, I hear, with joy I hear!
 (Immortality Ode, ll. 36–50)

こうして再び昔のような感動を味わうことによって、半ば失われてしまった “the pictures of the mind” を新たにすることができ、この風景は再び以前のような輝きを持って記憶され、これから自分の心を癒し続けてくれるものとなったわけである。実際は、Wordsworth は新しい教えを得ていたため、その必要はなかったわけだが、それでも妹がこの場にいたことは幸いであっただろう。自分にとって大切な記憶となっていた場所が、そこを再訪したことで、その記憶が薄れてしまった代わりに、自分の信仰を実際に体験によって深めることができたという、その記念すべき出来事が、妹がその場にいたことによってこの景色とともにいっそう鮮やかに記憶に焼き付けられることになったのである。それで、Wordsworth は次のように述べる。

in after years,
 When these wild ecstasies shall be matured

Into a sober pleasure; when thy mind
 Shall be a mansion for all lovely forms,
 Thy memory be as a dwelling-place
 For all sweet sounds and harmonies; oh! then,
 If solitude, or fear, or pain, or grief,
 Should be thy portion, with what healing thoughts
 Of tender joy wilt thou remember me,
 And these my exhortations!

(ll. 137–146)

もちろんこれは、人生の先輩として、保護者のような愛情を持って妹に向かって語っていることであるが、他者に向かってこのように力強く語ることは、自分自身の確信をよりいっそう強める働きをするものにほかならない。こうしてこのときの記憶は、5年前の記憶がそうであったように、今後逆境において “healing thoughts / Of tender joy” を与え続けるもの、いわばまた新たな spot of time とでもいうべきものになったと Wordsworth は確信したのである。それというのもこの Wye 川を再び訪れたことによるものだというわけで、この詩の冒頭で、「5年の月日の後に再び」ということをあれほどにまで強調することになったのであろう。そして妹の存在のおかげで喜びはいっそう大きくなったということで、最後に妹に対し感謝と祝福と祈りが捧げられる。こうして Wordsworth の傑作詩が生まれ、この 1798 年 7 月 13 日という「時の点」は Wordsworth と妹以外の人々にとっても永遠のものとなったのである。

Tintern Abbey において、Wordsworth は、自分と自然との間の新しい、そしてもっと深い関係を知るためには、子供の時の *aching joys* が失われてしまっても、そのことを悲しんだりはいらないと述べるが、しかしまた 5 年前に Wye 川を訪れて以来、そのときの記憶が自分にとってどんなに大切なものであったかということにも彼は気づいたのであった。それ故、5 年前の自分の姿をかなり細かく分析しているのである。いくら abundant recompense があるからといって、自分の過去がそんなに簡単に忘れ去られていいはずはないのである。また今 *The Recluse* という “Man, Nature, and Society” をテーマにした詩を書いているわけだから、人間と自然の関係については、はっきり確かめておかねばならない。特に Pedlar という自分の分身のような登場人物を生みだし、彼に託して、その壮大なテーマを語ろうとしているのであるから、Wordsworth はどうしても自分の人生を、それ自体として分析しないわけにはいかなかったのである。それに

“Tintern Abbey”では、強い感動、興奮の中にあってあの詩を書いたので、ひたすら one life の考えを信じ、力強く語ることができたが、やはり自分に生じた変化は戸惑いを感じさせたのであろう。だからこそ、4年後に “Immortality Ode” で同じ問題を取り上げることになり、しかもその答を出すまでにさらに2年もかかったのである。それはともあれ、“Tintern Abbey”を書いてから3ヶ月後に、Wordsworth はいよいよ *The Two-Part Prelude* にとりかかる。この1799年にDorothyによって清書された詩は、既に述べたとおり、“Was it for this” という this の内容が明確にされない疑問文で、それも行の途中から始まっている。もちろん Wordsworth 自身が、Coleridge への apology として書いたと述べているし、1805年には、その前に271行に及ぶ詩が置かれ、それによってこの this の内容は、Wordsworth が *The Recluse* を書くという目的を持ちながら、どうしてもそうできず、無為に日々を過ごしていることであるということがわかる。しかし本当に最初からそういうことであったのだろうか。

The Two-Part Prelude

Stephen Parrish は *The Cornell Wordsworth の The Prelude 1798-1799* の序文の中で、MS.JJ と呼ばれるもっとも古い原稿を詳しく調べ、その結果最初 First Part に当たる詩が書かれたとき、この “Was it for this” の前には1805年版で Wordsworth が glad preamble と呼んだ Book First, ll. 1-54 の一部が既に書かれていたと推測する。⁽⁴⁾ 彼は MS.JJ の詩の出だしが次のようなものであったとして、transcription を示している。

a mild creative breeze
a vital breeze that passes gently on
O'er things which it has made and soon becomes
A tempest a redundant energy
Creating not but as it may
disturbing things created. —

a storm not terrible but strong
with lights and shades and with a rushing power

trances of thought
And mountings of the mind compared to which
The wind that drives along th[is] autumnal[?] leaf
Is meekness.

what there is
Of subtler feeling of remembered joy
Of soul & spirit in departed sound
That can not be remembered.

a plain of leaves
Whose matted surface spreads for many [?Leagues]
A level prospect such as shepherds view
from some high promontory when the sea
Flames, & the sun is setting.

was it for this
That one, the fairest of all rivers, ...⁽⁷⁾

従って “Was it for this” の this とは、詩が書けないことでも、それからくる罪や自責の念でもなく、inspiration が強くあふれ出しすぎることによる当惑といったものであり、そのためこの疑問の調子はアイロニックでも悲しげでもなく、むしろ驚き、あるいは穏やかな高揚感でさえもあるかも知れないと Parrish は考えている。⁽⁴⁾ しかしこの余りにもうきうきと喜びに満ちた preamble は “Was it for this” というような曖昧で、どっちつかずの疑問文に直接つながるにはふさわしくなかったので、さらに post-preamble が書かれる必要があった。そして、Wordsworth がそれに取り掛かった時には、彼の気分は一変していて、philosophic poem を書くという彼の願いは果たされず、彼の心は “indolence from vain perplexity” (1805, l. 268) に陥っていたため、post-preamble はあのようなものになったというのが Parrish の考えである。⁽⁹⁾

彼のこの説は、説得力のあるものである。彼は、MS.JJ が “Tintern Abbey” と同じ調子で書き始められたとする。その理由は、“Tintern Abbey” の Wye 川に対し、こちらは Derwent 川への呼びかけで始まり、そして両者とも同じ女性、すなわち妹 Dorothy に語りかけることで結ばれているからである。⁽²⁰⁾ この MS.JJ は、Dorothy が使っていたノートに、その最後のページから前へ向かって書かれている。ただしまっすぐに進むのではなく、2、3ページ前へ戻っては、後ろへ書き進め、既に書き込んであるページまでくるとまた2、3ページ戻って後ろへ書き進めるといった形をとっている。そして大ガラスの巣、小鳥の毟、There was a boy の話、ボート盗みという、First Part の有名なエピソードのいくつかと、人間の精神及びその成長に関する考察を述べたいくつかの節とがバラ

バラに入っている。このことから、少なくともこの詩を書き始めた時は、具体的な計画ではなく、3ヶ月前に“Tintern Abbey”で、5年前及び現在の自分と Wye 川との関係に基づいて、この5年における自己の変化、成長を分析したように、今度は生まれ故郷を流れていた Derwent 川と、幼少時の自分との関係を考えながら、さらに昔の自分の成長の跡を考えてみようとしただけだったかも知れない。そして、子供の頃の記憶を辿ることで、その中にひととき強い輝きを持って鮮明に思い出されるいくつかの光景を取り上げて書き記すうちに、それらをまとめて、自分の成長を振り返る本格的な作品とする事に思い到ったのであろう。⁽²⁾

それがどの段階で、*The Recluse* を書く準備も兼ねて、自己の成長を辿る詩として意図されていたのかはわからない。MS.JJ の段階ではあの spots of time の節及びその前後の部分 (ll. 198-374) と、最後の Coleridge への呼びかけの部分 (ll. 442-459) は含まれていない。前者に置いて、Wordsworth は “Not uselessly employed, / I might pursue this theme through every change / Of exercise and sport” (ll. 198-200)、“the unity / Of this my argument” (ll. 253-4)、“the growth of mental power / And love of Nature’s works” (ll. 257-8) と、この詩のテーマや統一ということに言及しているし、後者の中では “my hope has been that I might fetch / Reproaches from my former years, whose power / May spur me on, in manhood now mature, / To honourable toil” (ll. 450-3) と *The Recluse* に触れているのである。それに spots of time について語ることによって First Part はあれらの相互に何の関わりもないエピソードが統一されて、明確な意味を持つようになったのである。spots of time の節は自分の過去の経験に対する解釈である。“Tintern Abbey”において、過去を振り返って、5年前に初めて訪れた時の自分の姿、そしてその後その記憶が自分にとってどういう意味を持ったかということについて考えた結果、“Nature never did betray / The heart that loved her” (ll. 122-3) という1つの信念を得たように、今度はもっと昔の体験、当時はそれが何を意味するのか全くわからなかった体験について考え、そういう解釈を行ったのである。しかも今度は “Tintern Abbey” のような特別な体験の真っ直中において高揚した気分のうちにその体験を考察したのではなく、もっと落ちついた気分で、これまでの人生全体を振り返ることができたので、さらに進んだ解釈が生まれてきたのである。それは例えば、First Part、413-42行目で述べられているように、自分がまだ vulgar joy (l. 413)、giddy pleasure (l. 415) の真っ直中にいた時でも、

Nature は既にもっと穏やかな深い影響を自分に及ぼしていたということである。それは、また別のところで次のように表現されている。

how I have felt
Not seldom, even in that tempestuous time,
Those hallowed and pure motions of the sense
Which seem in their simplicity to own
An intellectual charm, that calm delight
Which, if I err not, surely must belong
To those first-born affinities that fit
Our new existence to existing things,
And, in our dawn of being, constitute
The bond of union betwixt life and joy.

(First Part, ll. 381-90)

vulgar joy にひたっている子供時代 (that tempestuous time) にも、もっと穏やかな喜びを外界に感じる働きが我々に存在し、それが、我々と外界を結び付ける first-born affinities にあるというのである。従って、“Tintern Abbey”において、aching joys が失われたとき、それに対する abundant recompense として other gift が代わりに与えられたと考えていたものが、実は人生の最初の頃から自分に与えられていたということを悟ったのである。それ故、自分の変化に対する解釈は、“Tintern Abbey”よりも “Immortality Ode” の方がより正確だといえる。

What though the radiance which was once so bright
Be now for ever taken from my sight,
Though nothing can bring back the hour
Of splendour in the grass, of glory in the flower;

We will grieve not, rather find
Strength in what remains behind;
In the primal sympathy
Which having been must ever be;
In the soothing thoughts that spring
Out of human suffering;
In the faith that looks through death,

In years that bring the philosophic mind.

(Immortality Ode, ll. 176-187)

“Tintern Abbey”において、代償としての other gift だと思ったものは、実は what remains behind であり、それは primal sympathy や philosophic mind というものなのである。

この primal sympathy とは、先ほどの *The Two-Part Prelude* からの引用にあった first-born affinities と同じものであろう。“Which having been must ever be” という言い方は不確かで弱く聞こえるが、しかしその背後には長年にわたる人間の心の探求から得られた信念があると考えるべきである。Wordsworth が *The Two-Part Prelude* を拡大の目的を持って再び取り上げて、それと取り組み始めたのが 1804 年 1-3 月頃であるが、“Immortality Ode” は、ちょうどそのころ、つまり 1804 年 3 月初めに完成されている。最初の 4 連が書かれてから、2 年の月日が流れていたわけだが、そのあいだに再び自己分析の詩を取り上げたことによって、このような形で完成することができたのであろう。そして “the soothing thoughts that spring / Out of human suffering” や “the philosophic mind” という言葉は、あるいは *The Recluse* を意識してでてきた言葉であるかも知れない。

さて先ほど述べたように、*The Recluse* を意識しながらその準備として自己を振り返るというテーマをもって書き始めた結果、Second Part は First Part とはかなり性格が変わってしまったように思える。First Part では、幼少時の強い印象を持って記憶されている体験を語ることが中心になっていて、その間にそれを解釈する部分が差し挟まれている。この詩を書き始めた時は、あるいはその体験自体を語ることが目的であったかもしれないのが、*The Recluse* への序という目的を持ってからは、それらの意味、それらが自分を 1 つの方向へ導くためにこそ存在したという考えを述べることの方が主になっていったのである。その結果、Second Part には小鳥の畏、ボート盗み、あるいは父親の死というような独特の力に満ちた節は存在しない。Jonathan Wordsworth が Edmund Burke の有名な論文に基づいて、First Part が the sublime なら、Second Part は the beautiful であると述べているが、まさにその通りであろう。⁽²²⁾ そして the beautiful の方が、Wordsworth が Nature を間接的にではなく、それ自体のためにもっと深く愛するように、Nature が gentle visitation を行っていたということを述べる部分であって、子供の頃と現在の、自然と自分との関係の連続性を知ることによって、自分が Nature の chosen-child として *The Recluse* を書くために育てられてきたというテーマにはよりふさわしい部分なのである。もちろん spots of time は、early childhood に集中しているということが述べられているから、Second Part において、First Part よりも成長した時代のことを語っている以上、そういう spots of time となるべき体験はなくなってしまったということもあるかも知

れない。

ところで、このことは、Wordsworth の詩論に関わってくる。First Part のエピソードは読者に鮮やかな印象と感動を与える。これらは、例えば本来この First Part の一部として書かれた Nutting が結局その性格のために入れられず、独立した詩として出版されたとき、ユニークな興味深い作品となったように、*The Prelude* の context からはずして、それ自体として見ても魅力に富んだ詩となっている。これらのエピソードのおかげで、Book First は *The Prelude* 全体の中でも特に面白い巻となっているのだが、それというのも、Wordsworth がその体験を思い出すことによって、当時感じた通りの心理状態になって書いたからであろうと想像される。実際、例えば小鳥の畏やボート盗みは、20 年以上も昔のことであるにもかかわらず、今日の前の出来事を描いているかのような生き生きとした迫力を持って迫ってくるし、大ガラスの巣や絞首台の体験にいたっては、表現する言葉を失ってしまっているくらいである。ここで、Lyrical Ballads の序文が思い出される。

Poetry is the spontaneous overflow of powerful feelings: it takes its origin from emotion recollected in tranquillity: the emotion is contemplated till by a species of reaction the tranquillity gradually disappears, and an emotion, similar to that which was before the subject of contemplation, is gradually produced, and does itself actually exist in the mind. In this mood successful composition generally begins, and in a mood similar to this it is carried on; . . . ⁽²³⁾

tranquillity の中に思い出すことで、その時の emotion がよみがえってくるのである。この力によって、大人になった今では Nature を見ても感じることはできない aching joys をもう 1 度よみがえらせることができるのである。つまり、子供の頃よりもはるかに深い洞察を、人間や自然に対して行える状態にありながら、なおも子供の強い感動も感じることができ、その高揚感によって、見慣れてしまった外界のものに新たな輝きを与え、modifyするのである。これは Coleridge が *Biographia Literaria* の中で Wordsworth の特徴について述べている、「子供の感情を大人の能力の中にまで持ち続けること」に当たる。

To carry on the feelings of childhood into the powers of manhood; to combine the child's sense of wonder and novelty with the appearances, which every day for perhaps

forty years had rendered familiar;

With sun and moon and stars throughout the year,
And man and woman;

this is the character and privilege of genius, and one of the marks which distinguish genius from talents. ⁽²⁴⁾

“emotion recollected in tranquillity”をimaginationの源とするWordsworthにとって、幼年時代の記憶は、何物にも代えられない大切なものである。子供とは、その時に感じた感動や、心に刻みつけられた美しい風景が、その後永遠に大人の心を癒し、前進する力の源となってくれるものであり、またNatureは子供の頃から大人になるまで常に変わらない影響を及ぼし続けてくれるのだから、人は成長とともに変わっていくものだとしても、明らかにそこには連続性がある。そういうわけで、まさに“The Child is Father of the Man; / And I could wish my days to be / Bound each to each by natural piety”(The Rainbow)なのである。この信念を持ってWordsworthは次のように歌う。

Hence in a season of calm weather
Though inland far we be,
Our Souls have sight of that immortal sea
Which brought us hither,
Can in a moment travel thither,
And see the Children sport upon the shore,
And hear the mighty waters rolling evermore.
(Immortality Ode, ll. 162-168)

1804年に、*The Prelude* の大がかりな改訂に取り掛かった時、Wordsworthは上のように述べることができた。しかし事態は必ずしもそう楽観的なものではなかったのかもしれない。1805年版で、spots of timeの節が、Book Eleventhに移されたとき、絞首台と父親の死の2つのエピソードの間に、1799年にはなかった次のような1節が書かれている。

Oh mystery of man, from what a depth
Proceed thy honours! I am lost, but see
In simple childhood something of the base
On which thy greatness stands — but this I feel,
That from thyself it is that thou must give,

Else never canst receive. The days gone by
Come back upon me from the dawn almost
Of life; the hiding-places of my power
Seem open, I approach, and then they close;
I see by glimpses now, when age comes on
May scarcely see at all; and I would give
While yet we may, as far as words can give,
A substance and a life to what I feel:
I would enshrine the spirit of the past
For future restoration. Yet another
Of these to me affecting incidents,
With which we will conclude.

(1805, Book Eleventh, ll. 328-344)

Wordsworthは“hiding place of my power”、すなわち子供の頃の大変な記憶が失われるかもしれないと危惧しているのである。ところで、Book Secondには次のような1節がある。

For I would walk alone
In storm and tempest, or in starlight nights
Beneath the quiet heavens, and at that time
Have felt whate'er there is of power in sound
To breathe an elevated mood, by form
Or image unprofaned; and I would stand
Beneath some rock, listening to sounds that are
The ghostly language of the ancient earth,
Or make their dim abode in distant winds.
Thence did I drink the visionary power.
I deem not profitless those fleeting moods
Of shadowy exultation; not for this,
That they are kindred to our purer mind
And intellectual life, but that the soul —
Remembering how she felt, but what she felt
Remembering not — retains an obscure sense
Of possible sublimity, to which
With growing faculties she doth aspire,
With faculties still growing, feeling still
That whatsoever point they gain they still
Have something to pursue.

(1805, Book Second, ll. 321-341)

ここでは、視覚が役に立たないような状況のもとで神経を耳に集中し、得体の知れない不気味な音から visionary

powerを得て、一種の高揚感に浸るのであるが、具体的なイメージと結びついていないにも関わらず、そのときの感情は漠然と記憶されているのである。この部分は、*The Two-Part Prelude*において既に存在したものであるから、すなわち1799年の段階では、Wordsworthの詩的想像力の大切な源であるemotionはそれだけでも記憶されていたということであるが、1805年においてはそうはいかなくなったのである。しかし今はby glimpseとはいえ、まだとらえることができる、だから今のうちに“What I feel”を記録しておこうというのである。そうすれば、少なくとも記録されたものだけは、永遠に失われずにすむことになり、その記録を読み返すことで、当時の感情をよみがえらせることができるわけであろう。とすれば、Wordsworthが先ずやらねばならないことは、自分のこれまでの人生をできる限り書き留め、それによって、当時の感動の記憶を新たにしておくことである。1799年、*The Recluse*の序としての*The Prelude*をひとまず書き終えておきながら、その後再び取り上げて、序と呼ぶには余りにも巨大なものにまでしたのはそういう意図もあったのであろう。Wordsworthは*The Recluse*の完成を決してあきらめたのではなかった。ましてや、*The Prelude*の方が重要な作品と考えたわけではない。彼は最後まで*The Recluse*を書く意志のあることを主張している。しかしその*The Recluse*を書くためにこそ、その序として、そしてそれを生み出す力の源として、さらにまた、自然及びone lifeの信仰を確認するものとして、*The Prelude*に全力を注いだのである。そして、その後自分の信仰が変わっていくのに合わせて絶えず改訂し続けたのであろう。*The Recluse*はついに完成されなかったが、このWordsworth自身ともいえる*The Prelude*が、現存する多くのmanuscriptsによってその様々な発展段階の中にWordsworthの成長の過程を示してくれているのは喜ばしいことである。

註

本文中、*The Prelude*からの引用は、*The Prelude: 1799, 1805, 1850*, ed. by Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, and Stephen Gill (A Norton Critical Edition, 1979)による。そして、特に断らない限り、その行数は、1799年版*The Two-Part Prelude*のものである。それ以外の詩は*The Poetical Works of William Wordsworth*, ed. by Ernest de Selincourt, 5vols (Oxford at the Clarendon Press, 1952)によるものとする。

る。ただし、“The Pedlar”と“The Ruined Cottage”は、Jonathan Wordsworthが編集した、*William Wordsworth: The Pedlar, Tintern Abbey, The Two-Part Prelude* 及び *William Wordsworth: The Ruined Cottage, The Brothers, Michael* (ともにCambridge, 1985)に入っているtextをここでは用いた。なおJonathan Wordsworthのこれら2冊の本に言及するときは、前者はJ. W., *The Two-Part Prelude*、後者はJ. W., *The Ruined Cottage*と呼ぶものとする。

- (1) 1798年3月11日付、James Losh宛の手紙。*The Early Letters of William and Dorothy Wordsworth, 1787-1805*, ed. by de Selincourt (Oxford, 1935), p. 190.
- (2) Kenneth R. Johnston, *Wordsworth and The Recluse* (Yale University Press, 1984), pp. 5-7. この4つの詩は皆、blank verseによる物語詩で、瞑想的な調子で書かれている。そして詩の語り手が、路上で会った人からその身の上話を聞くという設定も同じであるし、テーマも共通する、ということをも Johnston は指摘している。
- (3) Johnston, pp. 19-21.
- (4) Johnston, p. 53.
- (5) *The Excursion*, Preface to the Edition of 1814. *Poetical Works*, vol.5, p.2.
- (6) Wordsworth 兄妹による、1798年12月から1799年1月頃の、Coleridge 宛の手紙。*Early Letters*, p. 206.
- (7) The Fenwick NoteでWordsworthは次のように述べている。“But had I been born in a class which would have deprived me of what is called a liberal education, it is not unlikely that being strong in body, I should have taken to a way of life such as that in which my Pedlar passed the greater part of his days. At all events I am here called upon freely to acknowledge that the character I have represented in his person is chiefly an idea of what I fancied my own character might have become in his circumstances. Nevertheless much of what he says & does had an external existence that fell under my own youthful & subsequent observation.” *The Ruined Cottage and The Pedlar (The Cornell Wordsworth)*, ed. by James Butler (Cornell University Press, 1979), p. 477.
- (8) “The Pedlar,” ll. 204-222 が、*The Two-Part Prelude*, Second Part, ll. 446-64, (*The 1805 Prelude* では Book Second, ll. 416-34) となっている。

- (9) これらのものに焦点を合わせた詩とは、“Lines left upon a Seat in a Yew-tree”、“The Thorn”、“Hart-leap Well”、“Michael”である。
- (10) Jonathan Wordsworth はこう述べている。“*The Two-Part Prelude* (1799) is an independent and beautifully self-contained work, which not only includes most of the famous poetry that has become known through later forms of the poem, but presents the great sequences — the ‘spots of time’ especially — in their original and most striking combination.” *J. W., The Two-Part Prelude*, Introduction, p. 1.
- (11) 小鳥の囀は ll. 27-49、大ガラスの巣は ll. 50-66、ボート盗みは ll. 81-129、スケートは ll. 150-185、水死体は ll. 258-287、そして 288 行目から spots of time が始まっている。行数は *The Two-Part Prelude*, First Part のものである。
- (12) Jonathan Wordsworth は、“The Pedlar”と“Tintern Abbey”が、*The Two-Part Prelude* への“natural introduction”となるであろうとし、この3つの詩の関係を論じている。*J. W., The Two-Part Prelude*, Introduction.
- (13) *J. W., The Two-Part Prelude*, p. 36, ll. 71-3 への註。
- (14) *J. W., The Two-Part Prelude*, p. 35, ll. 59-62 への註。
- (15) *J. W., The Ruined Cottage*, p. 1.
- (16) *The Prelude, 1798-1799*, by William Wordsworth (*The Cornell Wordsworth*), ed. by Stephen Parrish (Cornell University Press, 1977), p. 6.
- (17) Parrish, p. 123.
- (18) これには反論がある。1799年11月18日には、glad preamble は既に 1805年版の形にまで完成されていたにもかかわらず、それよりあとに Dorothy が清書した *The Two-Part Prelude* が“Was it for this”で始まっており、Dorothy がそれを“a poem of which the beginning is not written”と呼んでいた以上、Wordsworth はその preamble を this の内容としては意図していなかったはずである。従って MS.JJ の preamble に当たる詩とは後から書き込まれたもので、決して Was it for this の前にくるものではなかったと Jonathan Wordsworth は述べている。*The Prelude: 1799, 1805, 1850* (A Norton Critical Edition), p. 486.
- (19) Parrish, p. 36. 彼の言葉を引用すると、あの preamble は “too buoyant, too flatly joyous, to lead directly into the ambiguous hanging question ‘was it for this?’ The bringing passage — the remainder of the preamble and the ‘post-preamble’ (1805, ll. 55-271) — had still to be composed, and by the time he turned to them Wordsworth’s mood had altered.” というのである。
- (20) 既に引用した Coleridge 宛の手紙で、Dorothy は “Nutting” を “the conclusion of a poem of which the beginning is not written” と呼んでいる (*Early Letters*, p. 206)。そして “Nutting” の最後は Dorothy への呼びかけで終わっている。
- (21) 註(20)と同じ手紙で Wordsworth は Dorothy が書き写した skating と boat-stealing の詩を “a few descriptions” と呼んでいる (*Early Letters*, p. 204)。また Dorothy は、その boat-stealing の詩に関して、“I select it from the mass of what William has written because it may be easily detached from the rest”と述べている。従って、この時はまだ1つの詩として意図されてはいなかった可能性が強い。
- (22) *J. W., The Two-Part Prelude*, p. 15. Burke の論文とは、*Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and Beautiful* (1757) である。
- (23) *Wordsworth & Coleridge, Lyrical Ballads*, ed. by R. L. Brett and A. R. Jones (Methuen, new and revised impression, 1965), p. 266.
- (24) *Biographia Literaria*, ch. 4. *The Collected Coleridge*, vol. 7, *Biographia Literaria*, ed. by James Engell and W. Jackson Bate (Princeton University Press, 1983), pp. 80-81.